

## マルタとマリアの物語から

森 一弘

わが家に、イエスを客として迎え、イエスに気持ちよく過ごしてもらおうと気を配るマルタは、イエスの足下に座っているだけで、接待のために動かないマリアに対して苛々をつのらせ、イエスに向かって愚痴をこぼしてしまう。

「私の姉妹は、私だけにもてなしをさせていますが、なんともお思いになりませんか」（ルカ十章40）と。

そんなマルタに対してキリストは「マリアは、良いほうを選んだ、それを取り上げてはならない」と言い返し、マリアを守ってしまう。キリストは、マルタの何を咎めようとしたのだろうか。

このエピソードには、様々な解釈が可能だろうが、私には、社会の荒々しい競争についていけず、役立たない人間と決めつけられ、軽視されたり無視されたり、片隅に追いやられたりして、生きるための自信や希望を失ってしまう人々を念頭において解釈することもゆるされるように思われる。

その視点に立つと、私の頭の中に浮かび上がってくるマルタは、才能に恵まれ、ばりばりと家事も仕事もこなせる有能な女性である。性格は明るく、人付き合いも巧みで、周りからは頼りになる人として期待され、それまで大きな挫折も体験していない女性である。

そんな風にマルタを思い描いてしまうと、マリアは、その反対の極にいる人間になる。彼女は、学校や職場でいじめに遭い、傷つけられて、人に心が開けなくなって、心身ともに消耗しきっていた女性かもしれない。あるいは、仕事に失敗し、上司からも客からも厳しく責められ、意気消沈し、外に出る気力を失って

しまっていた女性かもしれない。あるいはまた、幼い頃から病弱で、勉強もよくできて健康的な姉と比較されながら育てられて、心の奥に深いコンプレックスを抱えて、生きる自信を失ってきってしまったのかもしれない。

自分の弱さに引きずり回されるだけのそんな彼女には、人を顧みる余裕もなければ、人のために尽くす力も気力もなく、自分の存在を支えるだけでも、精一杯である。

一般社会の人を量る物差しを適応すれば、マルタは「出来る人間」「有能な人間」、マリアは、「出来ない人間」「存在するだけで精一杯の人間」「哀れな人」ということになる。

しかし、軽々しく看過してはならないものが、彼女のような人間の中にある。

それは、存在そのものが、助けと支えを求めて、必死になって叫んでいるという真実である。その叫びは、必ず神を動かし、神を引き寄せるということである。出エジプト記には、人々の叫びに動かされ、人々に手を差し伸べようとする神の姿が描かれている（出エ三章7、8、参照）。

神が駆け寄り、抱きしめ温めようとする相手は、実に、存在全体で叫びを上げている者である。

この視点に立てば、社会の評価基準、人間を量る物差しは、逆転する。神に近い者は、マリアの方ということになる。

パウロは「力は弱さの中でこそ発揮される。（中略）だから、私は喜んで弱さを誇る」（コリント二、一二章9）と証言し、イエスの母マリアも「主は、思いあがる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降

ろし、身分の低い者を高くあげる」(ルカ一章51)と謳う。

福音は、存在すること自体を脅かされている人間を包み支える神の力であり愛である。もし、マルタが、イエスに、「妹のマリアは、傷つき苦しんでいます。

じっくりと話を聞いてあげてください」と言葉をかけていれば、彼女は、咎められることはなかったに違いない。

(東京教区司教)

---